



Title	米國中西部方言の音聲構造に就て(I)
Author(s)	林, 榮一
Citation	大阪外国語大学学報. 1952, 1, p. 99-120
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80088">https://hdl.handle.net/11094/80088</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 米國中西部方言の音聲構造に就て (I)

林 榮 一

## A Phonemic Analysis of American English in the Middle West (I)

By Eiichi Hayashi

### S U M M A R Y

The analysis carried out in this piece of work is exclusively based on the principles of Structural Linguistics that has developed a new field of linguistic study in these twenty odd years. The material worked on is the language the writer lived in while studying in the United States and what he got first-hand. The scribe's indulgence in the study of Phonology by the Cercle Linguistique de Prague and Phonemics by American structuralists has brought about a dissatisfaction on his part as regards the results achieved heretofore and motivated him to lay out the scheme of his own, far from perfect as it is. The limited space for each contribution, usual with this kind of publication, has of necessity curtailed much of his demonstration and what he has boiled down in this article is only concerned with the analysis of Vowels and Consonants of the said dialect, whose other aspects (i. e. the so-called supra-segmental phonemes) are to be dealt with in the succeeding volumes. As this is a comparatively new branch of linguistic science, not a few labyrinthine problems remain unsettled, especially in borderline cases, and the incompetent author has been more often than not put to a nonplus in face of complexities of theories, but his interpretations thereof are always for ferreting out the structural inner speechform of a particular 'langue'.

---

Ⅰ はしがき 米國は Michigan 州、風光明眉な湖水が點在する、Chicago と Detroit の二大都市の略々中間地帯に位して、その名を Ann Arbor と呼ぶ閑靜な小都市がある。これが Michigan 大學の所在地である。こゝは比較的冬が早く、又春の訪れも遅いが、初夏の頃ともなれば、いみじくもその名が示すが如く、全市樹木の緑に掩はれ、街行く男女の衣服も染まるようである。大都會の喧騒に程遠く、落着いた氣分の横溢した University Town である。1950 年度のガリオア資金による渡米留學生の一人として、私が笈を下したのは、近來米國有數の lin-

guists を擁して、Structural Linguistics (構造言語學) の Middle West に於ける牙城を標榜する、この大學であつた。此處には Dr. Charles C. Fries を所長とする English Language Institute があり、最近矢繼早に勞作を發表した Dr. Kenneth L. Pike が居る。言語地理學の Dr. Hans Kurath、英語史の Dr. Albert H. Marckwardt も Faculty の member であり、更に交換教授として東大言語學科の服部四郎博士が日本語及びウラルアルタイ言語學を講じて居た。私は Linguistics 専攻の Graduate Student として、之等の人々から懇切な指導を受けることが出來たのは、この上もない幸いであつた。英語學を専門とする私が、特に興味をもつたのは、その中でも Phonemics (音素學) の問題であり、且つ言語の科學的研究として音聲構造の考察こそ最も始源的な重要性を有するものであるという立場から、以下自分が直接その中で暮して觀察した Vox Americana の分析を、諸學者と共に試みたいと思う。その實用的價値は、英語の發音教授に連がることは申す迄もない (戰時中米國で行はれた ASTP や CATS 参照。尙 Fries 氏の教授法もこれによつてゐる)。ただ、極めて制限された紙面に於ては、到底委曲を盡くすことは不可能であるので、ほんのかいなでの敘述に終らざるを得ないことは豫め諒承を乞はねばならない。

2 構造言語學 Phonemics とは Prague 學派の所謂 Phonology (音韻學) と結局同じものであるが (歴史的には兩者は互に獨立的に發達したものとされる)、廣義の Morphemics 乃至 Morphology (形態〔素〕學) に對する Structural Linguistics の一つの branch である。従つて、順序として、構造言語學とは如何なるものであるかを、極く簡単に述べておきたい。凡そ言語というものは、吾人の知性の努力に對して永遠の謎をかける Sphinx である。その本質的解明の歴史は常に résidu を伴つてゐる。ことは人間自体の問題であるとも言えよう。然し古代の思辨的な言語觀とは異り、近代の科學としての言語學は、その必然の制限の枠内に於ては、かなり顯着な發達を示して來てゐる。眞の意味に於ける言語學は Sanskrit の發見に連なる諸種の研究に始まつたと考えるべきであるが、Fries 教授に従えば、その第 1 期は Rask の有名な論文に始まり、Grimm の法則を経て、第 2 期の Verner の法則及び Paul, Brugmann 等の Junggrammatiker の主張 (彼等の Ausnahmslosigkeit の Lautgesetz は批難があるが、構造言語學の萌芽を認める人もないではない。然し Trubetzkoy などは、例えば Jespersen が之を問題としているのは [Lehrbuch, Zur Lautgesetzfrage] Mundlage としてであるとして、根本的態度の相違を指摘している) となつたのであるが、その第 3 期は Sapir (1834—1939) が Sound Patterns in Language (1925) を發表したことによる構造言語學の誕生にあるということになる (この言は多少修正を要する個所もあろうが、或る人達の考えを代表する)。この論文

は非常に示唆に富んだもので、要は各言語の内的体系の pattern を究明することを言語学の課題とすることを説いたものである。彼は configurative (ゲントルト的) な人類学者 Boas の影響を受けて、米土語の field work に大きな業績を残した米言語学界の大先達であるが、既成印歐語学の概念や範疇が常に有用でないことを實地に當つて検証し、言語の研究の Methode としては、慣行實態の正確な観察による資料の蒐集と、それに基づく厳密な手續による歸納の他には頼るべきものがないことを確認した。そして言語もその一つである人間の社會行動の中には整然性を見出し得る可能性を直観したのである。彼の場合は示唆的で稍心理的であるが、これを論理的に規定し方法論的に纏めあげたのが Bloomfield (1887—1949) で、彼の “Language” は米國言語学者の Bible 的存在である。現代米國の代表的 Structuralists の一人である Bloch などは、その流れを顯著に受けついでいる。Bloomfield の學説の要點は、言語とは Stimulus に對する Response の關係 (S—r…s—R) であつて、その signal である音聲に具現された形式を取扱うのが言語學であるということで、心理的要素の介入を極力排斥している。即ち自然科学的實證性を重んじているわけである。このことは、歐洲に於て de Courtenay や de Saussure を經て、1923年に發足した Prague 學派が、最初 Lautabsicht などの語を使用していたのに、次第に態度を變えて、最近の Vachek や Martinet 等の論説に見られるように funktionel な解釋に落ち着いて來たのと軌を一にしていると言えよう。尙 Acta Linguistica を出している Denmark 派の Hjelmslev, Uldall 等がやつている Glossematics (Cenematics 又は Plere-matics) は、その實踐は稍抽象的で純理的であるが、基本的態度は大差がないと考えられる。

構造言語學とは、一口に言えば、全く客觀的な事實に甚き、歪められた主觀の價值判斷を無縁化し、形式的分析(意味の介入は或る人達の主張するように全く除外することは不可能ではあるが、これを最少限度にとゞめる)と綜合により各言語の構造特質を合目的的に闡明せんとするもので、“Hypotheses non fingo” 的な、文化科學としては最も rigorous な method を發展せしめたものであろう。勿論言語は人間の主体性を離れて存在するものでなく、餘りに機械的な操作に耽けるならば、その本質面を逸する恐れがないでもない(例えば、[ŋ] と [h] を distribution の原則から、同一の Phoneme とするが如き)が、科學としては未だ充分に實證的な成果を擧げていない心理とか意識とか或は意味とかの哲學的領域に深入りしないことは賢明であろう。その根本的言語觀は、言語とは vocal symbols の個有の totality に於ける system であるとする立場であると要約してよい。對象は「もの」としての言語であり、直交する空間座標は Langue、時間座標は特定の發展段階であつて、synchronique な面を先づ取り上げる。諸言語の多様性及び特定言語内の整然性は一應自明的措定である。そして Parole に於て actualize (realize) される recurrent な essential な features の pattern 化は、Bühler の所謂 “Stoffdenken”

を超えた、或る意味での内的言語形式の定立を意味するとも言えるのではないかと思う。その手順は phonetic data の蒐集——構造単位 (phoneme とか morpheme) の発見——構造型式の定立——構造体系の組織ということになる。言語の symbol は arbitrary なものであり、その實踐は社会的習慣なのであるから、この体系を把握することは genius を掴むよすがとならねばならない。尙構造言語學の下位区分としては、音聲構造に関しては Phonemics、文法構造に関しては Morphemics がある。後者は更に語形態を扱う狭義の Morphemics と文形態を扱う Syntax に分れる (Nida に依る)。Phonemics と Morphemics の兩者を綜合して Morphophonemics (或は Phonomechanics) 乃至 Syntactophonemics と呼ばれる branch があるが、これはまだ發達途上にある (大きな分類では兩者とも Morphemics に含まれるべきものである)。尙言語學一般で構造言語學の占める位置は Descriptive Linguistics のそれであり、Historical なものに對するのが普通であるが、Trager の分類によれば Prelinguistics, Microlinguistics, Metalinguistics (總稱して Macrolinguistics という) の中央のものに相當する。

**3 Phonetics と Phonemics** Pike の譬喩を借りるならば、“Phonetics gathers raw material. Phonemics cooks it” というわけで、Phonetics はナマの材料に於ける仕事を擔當する。即ち言語音を、生理的に物理的に、又 productive に perceptive に、ありのままを觀察し (器械を利用して記録する事は益々盛となつてゐる)、具体的である。Phonetics の言語研究の基礎學としての重要性は決定的なものであろう。Phonemics はこれを資料にして、即ち最も外在的に把握された形式を基にして、言語本來の機能を合目的的に記述するものである。實驗音聲學等によつて、音聲が極めて微細な點まで解明されたとしても、それだけでは、一つの構造体系としての言語の本質は明らかにならないからである。理論的にも又實際的にも無限の變化を持つ actualization (realization) があるにかかはらず、何れの言語に於ても現實としてはその構造的單位として極めて限定された音を有するにすぎない事實 (例えば英語の paper の二つの p の aspiration の有無は問題にならぬというが如き) が、斯學の新しい分野開拓の一つの契機を與えたのであつた。又音聲學的に類似した二音が、二つの言語の音聲構造に於て同様な位置づけをもつとも限らないし、分節の問題其他に於ても、夫々の langue による特有な pattern を發見しなければならぬ。之等は音聲學本來の仕事ではないのである。但し、Phonemics の解釋は Phonetics の事實の上に立つものであり、抽象は具体によつて正當性を裏書きされねばならないということと、嚴密な共時的体系の例外的事實はたゞ通時的説明のみが cover するものであるということは、この際銘記しておかねばならない。

尙本稿に於ては、音聲記號は IPA の我國で從來親しまれてゐる慣行の簡略表記を〔 〕の

brackets で圍んで用い、音素記號は Trager と Bloch の示唆による / / の virgules で圍むことにする (Morphophonemics では { } の braces を用いることになっているが、本稿ではこれにまで觸れないつもりである)。最後に蛇足ながら附記すれば、Phonemics とは米國で主として使用される名稱であり、従來 Phonology と言はれていたもので、Phoneme の概念を中心とする音韻學、音素學の謂であるが、de Saussure は (そして彼に従う人々は [例えば Grammont]), これを Phonétique と稱し、音聲學を PhonoLogie と呼ぶから混同を避けねばならない。尙Bühler の “Sprachtheorie” は兩者に就て色々と言及している個所がある。

4 **Phoneme** Phoneme (音素) の概念は19世紀の後半に de Courtenay の門下 (Kruszewski) によつても發表されて居り、左程新しいものではないが、彼の “Versuch einer Theorie phonetischer Alternationen” (1895) や de Saussure の “Cours de Linguistique Générale” (1916) によつて近代言語學に導入された。例えば de Saussure は “la somme des impressions acoustiques et des mouvements articulatoires, de l'unité entendue et de l'unité parlée, l'une conditionant l'autre” (op. cit., p. 65) と phonème を觀ている。1923年に發足した Cercle Linguistique de Prague は、この方面に於ける研究の重要性を確立したが、Trubetzkoy (1890—1938) 等は最初はこれを “die sich in den Sprachlauten realisierenden, im Sprachbewusstsein lebenden Lautabsichten” などと言つていたが、其後TCLP IV では、斯の如き心理的言辭を避けて technically に規定した。TCLP VI に Vachek がそれを訂補しているが、それによれば、 “Part d'une term d'une opposition phonologique complexe, decoupable parfois en unités phonologiques simultanées, mais jamais en unités phonologiques successives” ということになる。一方 Jones 等の音聲學者達 (Palmer 及び Kenyon は我々としては注目すべきである) は、別の立場から phoneme を規定している。この勢力も侮り難いものがあつて、Martinet も London 大學で “Phonology as Functional Phonetics” (1946) を講演した時は Jones に敬意を一應表している。Jones の最近の勞作 “The Phoneme, Its Nature and Use” (1950) によれば、 “a family of sounds in a given language which are related in character and are used in such a way that no one member ever occurs in a word in the same phonetic context as any other member” というものである。尤も彼は “Possibly it is undefinable like the fundamental concepts of other sciences” (Acta Linguistica IV) という意味のことを繰返し諸所で述べて獨斷を慎んでいるのであるが、凡そ定義ということとは困難な仕事であつて、何處かに脆弱な盲點があるのが常である。Bloomfield は、phoneme とは繰返される現實の sounds の distinctive な feature であるということ、彼の “Language” で色々述べている。即ち “A minimum same of vocal feature is a phon-

eme or distinctive sound”とか“A minimum unit of sound-feature, a phoneme”とかいう説明である。Sapir の “psychological reality” の説も面白いが、mentalistic として排斥される。Graff の “A mnemonic type, an empirical product” 説は Vachek の支持する所であるが、限界が難かしい。Twaddell は彼の “On Defining the phoneme” (1935) に於て Sapir, Trubetzkoy 等を「mind なる x を以て事象を説明せんとするのは logical fallacy である」と攻撃し、Jones や Bloomfield 等を physical Reality としての phoneme を主張するものとして、Jones の場合は family を器官發生的類似を以て纏めるならば、その切れ目を確然とし得ない憾みがあり、Bloomfield の feature は之を抽出する客觀的 data は存在しないと批判している。彼自身の考える phoneme とは abstractional fictitious unit であり、主として contrast による嚴密な手順を紹介している。彼の緻密な分析には敬服するが、又それなりに shortcomings も少くない。米國に於ては phoneme に関する論戰は、1932—38の間に最も華やかに行はれ（その多くは雑誌 Language に發表されている）、仔細に述べれば際限がないので割愛するが、根本的に考えなければならぬことは、その實際の表記が如何になるかというよりも、その結果を如何に解釋するかという問題であると思はれる。即ち Jones 等の立場は結局音聲學的な解釋以上に枠を外さないのに對し、phonemicist の立場は、phoneme を特定の langue に於ける音聲構造の体系の單位とみるものである。Pike の定義を彼の “Phonemics” から引用すると、“The sounds of a language are automatically and unconsciously organized by the native into structural units, which we call PHONEMES.” (p. 57) とある。彼の phoneme は sounds の ①Nature (音聲學的な)、②Distribution (構造型式による)、③Actualization (allophone 實現の) の三者の綜合であり、その發見には種々の手續を規定しているのであるが、彼の立場は、native reaction の合理的解釋に主點を置くものであり、その爲の practical orthography を定立することが重要な仕事である。このことに對しては勿論反對論も存在するが、Jones が結局自己の立場を持して譲らないのと同様な意味に於て、やはり一つの行き方であると考へる。尙 Phoneme の實在性に就ては、心的、物理的、形而上學的、假構的、或は非存在的な解釋があり、一種の determinism に陥つてゐるものもあるが、私はこれは例の Scheinproblem の如きものではないかと思ふ（尙 Jones: The Phoneme, p. 217 参照）。大体に於て米國の phonemicists は Prague 派の phonologists に對して、より形式的であり技術的機械的であり（更近米國で出版された Zelig Harris の “Methods in Structural Linguistics” [1951] はこの傾向を端的に示している）、又 phoneme 中心的で、後者の主張する opposition, disjunction 等による分類作業、或は所謂意味的示差機能の問題には興味を左程示していない。彼等にとつては、其等の仕事は pragmatically には無縁の觀念的遊戯の如く見えるようである

(一体に、米國の phonemicists は Prague 派の Phonologists を mentalistic として尊重しない傾向がある。その意味で、今米國に居る Jakobson などは餘り高く評價しないのである。然しこのことに就ては色々反省の必要もあり、又歐洲から米國に來住した學者達は Linguistic Circle of New York をつくり、雑誌 “Word” を發行して兩者の意見の交流につとめている)。一般的に phoneme を定立する criteria は、①音聲學的 similarity ②互に overlapping しない non-intersection ③contrastive 及び complementary (即ち mutually exclusive) な distribution ④單位的に allophone を含む completeness ⑤totality に於ける structural pattern の congruity ⑥可及的に simple な、そして regular な説明を爲し得る記號の economy ⑦substitution の test に堪え得る consistency、等々である。この各々に就ても詳しい説明が必要であるが、今はその餘裕がない(ただ上記の中で③の distribution は最も重要なもので、Prague 派の “function” にも相通するものであることだけを指摘しておく)。尙、以上の如き條件を満し得ても、必ずしもその分析が諸家の間で一致するとは限らないという事實がある。この margin は、結局更に Phonemics が高度の發達を遂げた際には解消するものであるか、或は造物主に對する挑戰が甘んじなければならぬ宿命であるのか、趙元任 (Y. R. Chao) の音位標音法的多能性 (Non-uniqueness of Phonemic Solution of Phonetic Systems) は、結局この種の探究も、他の場合と同じく、夫々の目的に對する手段としての相對的價值を有するに過ぎないなことを述べたものとして注目に値する。たゞこれに對して、吾人の思惟的要請としての事物の合目的的解釋に於て、真理えの近似的接近が漸進的淘汰によつてその距離を縮め得るという態度も成り立つ。Lautgebilde の Einheit えの到達は悲願ではあるにしても、可能性の否定ではないであろう。

次に phoneme は從來主として單音的なものを對象していたのであるが、果してどの程度にまで、その概念を擴張し得るかという問題がある。現在米國の學者達が一般に行つているやり方を Bloch 等に従つて紹介してみると次の如くである。即ち從來の phoneme は、之を segmental phoneme と呼ぶ、その内譯は vowel 及び consonant である。之に對して suprasegmental phoneme というものがある(このこと自体にも問題があるが、いづれ後段に於て觸れる)。この内譯は prosodic phoneme (prosodeme) 及び juncture phoneme となる。prosodeme とは segment と同時的な因子で、更に高さの phoneme (例えば tone phoneme 即ち toneme 等)、強さの phoneme (例えば stress phoneme 即ち taseme 等)、長さの phoneme (例えば time phoneme 即ち chroneme 等)、更には文章の抑揚の phoneme (例えば intonation phoneme 即ち intoneme 等)、又律動の phoneme (rhythm 乃至 pause の phoneme 或は mora の問題)等に分けることが出来る。juncture phoneme は更に open juncture (これは external 及び internal に分れる) と close juncture に細別される。juncture とは utterance の前後

の pause とか、語の要素の結合関係のあり方に關するもので Trubetzkoy の “suture” と類似のものである。之等の suprasegmental phoneme に關しては反對論者も當然存在するわけであるが、時には分析の爲の分析になる恐れがないとしても、このような要素分解的方法の意味に就ても考えることが必要であろう。之等の各々に就ては、順を追つて検討を加えるつもりである。尙 Hjelmslev の Cenematics では ceneme と稱するものを案出しているが、細部は兎も角趣旨は似たものである。

**5 米國中西部方言** 本稿で取扱う對象は米國の中西部地方に於て話されている英語であるがこれに就て若干述べておくことは無益ではないと考える。一口に英語と言つても、必ずしも一樣でないことは申すまでもないのであつて、例の變則的な Pidgin, Baboo, Sandalwood English 等の類いは別として、現在英語を native tongue としている人間は世界で2億5千萬を上廻つてゐる。その分布から考えても、地域的に又階級的に、かなりの相違があることは首肯出来る。英本國に於ける諸方言に加えて外廓的にも數多い方言がある。この場合米國に於ける英語に問題を限定するとしても、必ずしも簡單ではない。階級的には米國は英國と異り、左程 sharp な線を引くことは出来ないが、地域的には、從來 Eastern, Southern 及び Western (General, Northern, Middle Western, Standard, American と呼ばれる) の三分説がある。然し最近の言語地理學の發達は General American なるものが果して存在するかという疑問を投げかけてゐる。Kurath は1949年の著書でこの事を否定している。Middle West という言葉も實は漠然たるもので、その地域が言語の分布を示すものでないことも推測がつく。Kenyon-Knott の發音辭典も regional な區分に關しては、“subject to sweeping revision” と Kurath に評され、C. K. Thomas の“音聲學”の區分も不正確だと叩かれている。つまり Midwest と言つても、その中ではまだまだ今後の調査によらなければならぬ點が多く残つてゐるので、確定的な generalization は危険なのである。この中で部分的ではあるが、Great Lake Area の發音分布を調べた Marckwardt の報告は興味がある。私が居た Michigan はその地域内にあり、問題となる點も幾分それによつて解決出来るので、本稿で取り上げるものは、主として Kurath 的には Midland の流れである所の從來 General American と呼ばれているものの中で、更にその母胎と見られる Middle West の、具体的に言えば、Illinois, Indiana, Michigan, Ohio 州等の Great Lake Area の speech である。仔細に觀すれば、その中でも必ずしも一樣ではないという厄介な事情があるけれども、大体の目安をこの程度に置かざるを得ない現状である。標題に中西部方言と記したのは、多少の相違はあるが、音韻組織の体系からみれば、東部や南部とは、上の如く大きく枠をはめても、區別し得るという見透しによつたからである。尙申す迄もないこと

であるが、普通の教養ある人士の大多數が、普通の状態に於て、informally に又 normal な speed と style で使用する“話し言葉”を對象としている。

**6 Segmental Phoneme** Phonemics は phoneme を定立することより開始されるが、phoneme の第一歩は Stetson の言うごとく segmentation に始まる。segment とは繼起的最小単位の音(例えば、[p, b, m] は lip-stroke に夫々 surd+stop, sonant+stop, sonant+continuant が加はつたもの)であつて、従來の狭義の phoneme に該當する。併、この segmental phoneme は vowel と consonant に分れる。こゝで注意すべきは、この兩者の區別は Phonemics のものであつて、Phonetics のものでないことである。即ち Phonetics で従來母音とか子音とか稱していたものは、その區別が困難であり(例えば [i, j])、屢々曖昧に便宜的に用いられている。例えば nasal vowel とか言つて certain ['sə:tn] の[n] を説明する如き場合がそれである。これは Phonetics と Phonemics を混同した結果であつて、Pike はその區別を立て、Phonetics では vocoid (a sound during which air leaves the mouth over the center of the tongue and without friction in the mouth) と non-vocoid (contoid) に分け、Phonemics では vowel (syllabic) と consonant (non-syllabic) とする。de Saussure が sonante と consonante を voyelle 及び consonne と別にした態度は、之に通ずるものであろう。vocoid と vowel、或は contoid と consonant は、多くの場合一致するが、必ずしも常にそうではない。例えば、[j, w, h] は vocoid であるが、vowel として Phonemics では取り扱はない。

次に、結論を最初に持ち出す恰好になるが、議論を進める便宜上、私の解釋する音素表 (Phonemic Chart) を掲げる。

	V	Bil-	Labio-	Inter-	Alveo-	Alveo-	Pala-	Retro-	Neu-	V e l a r	Glot-		
		labial	dental	dental	lar	palatal	tal	flexive	tral				
Consonant	S t o p	-	p			t				k			
		+	b			d				g			
	Fricative	-		f	θ	s	ʃ					h	
		+		v	ð	z	ʒ						
	Affricate	-					c						
		+					j						
	Nasal	+	m			n				ŋ			
	Lateral	+				l							
	Glide	+	w					y	r	ə			
	Vowel										Front	Cent-	Back
											High	i	u
											Mid	e	Λ
										Low	æ		a

(A) **Vowel** Jones が英國南方英語の母音に就て、彼の音聲學的 phoneme の解釋によつて行つてゐる簡略表記は [i:, i, e, æ, a:, ɔ:, ɒ, o, u:, u, ʌ, ə:, ə; ei, ai, au, ɔi, ou, iə, eə, ɔə, uə, ui] である(彼の近著“The Phoneme”に於ては、今少しくつゝこんだ解釋を加えてゐるが、其等に就ては逐次述べることにする)。米國音にもこの組織は多少の變更を加えれば適用出来る。然し Kenyon は [i:, i] や [u:, u] 等の quantity による差別は、ギリシヤ、ラテンの古典語ならいざ知らず、現代の英語にとつては無意義であるとして、彼の所謂 North American に関しては同じく音聲學的 phoneme として quality に基く [i, i, e, e, æ, a<sup>(p)</sup>, ɔ, o, u, u, ʌ, ə, ə, ɜ; ɜ, aɪ, au, ɔɪ, ju, iu] を用いてゐる。このやり方は多くの賛成者を得て、C. K. Thomas 其他も大体之を採用してゐる。Pike は、之を Phonemics の立場から整理して、/i, i, e, e, æ, a, ɔ, o, u, u, ə; aɪ, au, ɔɪ/ という phoneme を定立してゐる。若干これに就て説明を加えるならば、彼の立場は native speaker の reaction (これは objective evidence と考えられる) を出發點とするのであるから、Summer Language Institute に集まつた學生達に就て實驗を行つた結果、[ʌ] と [ə] とは單に stress の有無による區別であつて、兩者を /ə/ と解釋すべきであるとし(これに就ては、Gerhard, Bloch, Pike 等と Jones 一派と意見の相違があるが、米語に関しては Jones はその妥當性を認めてゐる。因みに、Jones が示してゐるものに、英國南方英語の或るものに於ける兩者の差は just [dʒəst] (adv.) [dʒʌst] (adj.) 等がある)、又 /i, i/, /u, u/, /o, ɔ/ は tense と lax (Sweet の narrow と wide) の差であつて、決して長短の差ではないとする。Jones は duration に distinctive feature を認め、むしろ /i:, i/, /u:, u/, /o:, o/, 更に /a:, a/ [ɑ, æ] とすべきであると言う。但し米語や Northern English では duration は tamber に席を譲つてもよいと述べ、これは所謂 borderline case の一つとしてゐる (Trnka がその “A Phonological Analysis of Present-day Standard English” で英國英語に就て行つた分析は /ɔ:, ɔ/ の對立のみを認めてゐない)。更に /e/ と /o/ は、一方 /a<sup>l</sup>, au, ɔɪ/ という diphthong を認めてゐる立場から何故 /eɪ, ou/ としないで monophthong とするかというと、第一に、英語では既に Sweet や Jones も述べてゐる如く tense な音は自然に向狹的に diphthongize する傾向があるのであつて、必ずしもこれ等を二重母音とする必要はない。第二に、Midwestern American の native speaker は /e, o/ を level に produce することも recognize することも困難であるという證據がある(このことは私も Phonetics の laboratory の授業で確めてゐる)。第三に、ゆつくり言う時は glide が聞えるが、早く話す時は(即ち precontour の場合〔後述〕)はそれがない。第四に、stress の有無が glide の有無に係る。第五に、hot の /a/ は pie /aɪ/ と全く同じと認めれるに對し、/e, o/ の場合には、そのような比較をするものがない。第六に、visible speech に於ける physical nature も /aɪ, au, ɔɪ/ と /e, o/ とは異なる。従つて

simple unit として見るべきであると断定するのである (On the Phonemic Status of English Diphthongs)。尙求心二重母音は /r/ の存在によつて、こゝでは問題にならない (昇り及び水平二重母音も、こゝでは論外になる)。又 [ɜ, ə] の區別も /ə/ 一つで表はして差支えないことは、申すまでもあるまい。[a, ɑ] が /a/ となるのも同様である。そこで、次に具体例を示して、色々論じてみよう。Pike に従えば、beat [bit] /bit/, bit [bit] /bɪt/, bait [beit] /bet/, bet [bet] /bet/, bat [bæt] /bæt/, bot [bɒt] /bat/ (balm[bɑ:m]/bam/), boat [bɔt] /bot/, bought [bɔ:t] /bot/ (boss[bɒs]/bɒs/), boot[bu:t]/but/, bull [bul] /bul/, but [bʌt] /bət/, bite [bait] /bɛt/, bout [bɔt] /bɔt/, boil [boil] /boɪl/ となる。そこで上に述べた /e, o/ が simple phoneme であるとするならば、/aɪ, aʊ, oɪ/ も同様に考えられないかという疑問が起る。Trubetzkoy も “Grundzüge” で “Sehr oft werden Diphthonge als einheitliche Phonem gewertet.” と言ひ、Vachek も “Die phonologische Interpretation der Diphthonge” で同様な解釋を下しているとすれば (Vachek の立場は一個の phoneme として認價さるべき音聲結合は二つの Syllable に分節されるものであつてはならず、統一的分節運動乃至は一個の分節成体の漸次的減衰 [Abbau] による [Palmer 等の所謂 kinetic vowel である] 英語の二重母音は、Bewegungsdiphthong で、一つの Phonem とみるものである)、こゝで思い出すのは、Swadesh が “The Vowels of Chicago English” で示した、Blunt /ɪ, e, æ, ə, ɑ, ɔ, u/ 及び Sharp /i, e, ɔ, ɑ, ɑ, o, u/ の表記である。即ち bite/bɛt/, bout//bɔt/, boil /boɪl/ である。この方が徹底しているかもしれない (Trnka は [ɔi] のみを diphthong から omit している)。然しこゝに全く別な觀方も可能である。Bloomfield は、beat/bɛjt/, bit/bit/, bait/bejt/, bet/bet/, bat/bet/, bot/bot/, balm /bam/, boat /bowt/, bought/bɔt/ (boss /bɒs/), boot /buwt/, bull /bul/, but /bot/, bite /bɛjt/, bout /bawt/, boil /boɪl/ (記號は約束であるから、奇妙な使い方をしていると非難は不當であると彼は別なところで述べている) としている。彼に従えば、/ij, uw, aj, aw, ej, ow, oj, juw(few)/ は compound primary phoneme である。即ち従來二重母音の第二要素を特殊子音と看做すわけである。Bloch はこの説を繼承している。彼の scheme を紹介すると、beat/bɛjt/, bit/bit/, bait/bejt/, bet/bet/, bat/bat/, bot/bot/, balm /bahm/ (Bloch は [a:] の如き長母音の引き伸ばし要素を /h/ と解釋する。これは complementary distribution の原理 [即ち母音が二つ続く pattern がない故に [:] は子音であることは bait の /ej/ と同様に解されるべきであり、子音の中では /h/ が母音の直後、及び子音の直前に來ないという分布によつて、之を引伸ばし要素とすることは論理的に矛盾しない]、及び /h/ の音は舌の位置が neutral である事實によると述べている [The Syllabic Phonemes of English]。然しこれは明らかに無理があると思はれる)。

boat/bəwt/, bought/boht/, boss/bos/, boot/buwt/, bull/bul/, but/bət/, bite/bajt/, bout/bawt/, boil/bojl/ということになる。其他色々諸學者の説があるが、大体今まで述べて来た所でその代表的なものの大要が了解されると思うので、これ以上紹介するのは控える（其後注目すべきものに、Trager & Smith の “An Outline of English Structure” [1951] が出て母音の數を9にした由であるが、未見なので今は何とも言えない）。

偕、これから以上の諸説を參酌しつつ、私の考えるところを述べることにしたい。第一に、Phonemics は Phonetics と異り、音聲構造の單位及びその結合状態を發見して体系づけるのであるから、兩者の觀點は角度を異にしている爲、Phonetics に於て reflect される表記的相違は、Phonemics に於ては必ずしも reflect されないことは認めてよいが、これを極端に解釋して、後者がその表記に於て前者の現實の音を曲げることはまづいと思う。従つて、米國英語（中西部方言）に於て bot と bought の母音は明らかに異つた發音であるのに Bloch がこれを共に /o/ と表はし、又 bat と bite を同じく /a/ とすることは、論理的に矛盾がなくとも、餘り感心しない。同様な意味に於て boat を /əwt/ とするのもどうかと思う。又 [ə] を Bloomfield は /o/, Bloch は /ə/ とするが、兩人とも、これを back vowel としているのも氣にかゝる。記號は arbitrary なものであるから、何を使つてもかまはぬ道理であるが、なるべく一般的なものに従う方が得策であろう。可能な限りに於て Phonetics の記號を Phonemics に用いることは差支えがないし、又わかり易い。bat /bet/ もこの意味では不便と思う。第二にその逆も困る。Pike の記號は餘りに phonetic であつて、實用的で便利であるが、悪く言えば Kenyon 式のものを少し簡単にしたものすぎない。その爲に稍理論的に不徹底な面があるのではなからうか。/u, ʊ/ 及び /i, ɪ/ は tense 及び lax でも納得が行くが、/e, ɛ/ と /o, ɔ/ との関係は、それだけでは割り切れないものが残る。speed や stress の有無で complexity を否定するのは根據が弱く、/aɪ/ 等の二重母音との區別が明確ではない。然も real/rɪəl/ の如き場合は二音節とみるのに rɪl [rail] は一音節として nuclear unit とする理由は不完全であると思う。第三に Phonetics を如何に phonemically に interpret するか、という問題がある。その意味は、例えば /i, ɪ/ や /u, ʊ/ の如き contrast をなす phoneme に於て、長短は環境によるわけであるから quantity は無視するというのが、そのように音聲學の事實に頼るのであれば、同一環境に於ける之等の對立する音の相對的長さは後者が前者より短いという事實に觸れないのは片手落ではなからうか。/e, ɛ/ 及び /o, ɔ/ に於ても、同じ條件では前者が二重母音であるという事實は動かせない筈である（Michigan大學の The English Language Institute では、この Pike による phonemic alphabet で英語の發音を教授しているが、instructor は /e/ は [ei]、/o/ は [ou] となることをわざわざ注意しなければならないのである）。私は、Phonetics の事實と Phonemics の解釋は、夫々の立

場から相對的に一貫した關係を持つべきであると考え。又 Bloomfield が特に schwa sound を認めず、stress の有無によつて、それを imply したのは consistent であるが、やはり難點があり、又 syllabic を vowel とする立場からすれば、mental/mentl/とすることには賛成出来ない。

斯くの如く觀じて來ると、私はこの節の最初に擧げたような母音表を作成せざるを得ないのである。そこでこれから私の scheme を説明しながら上に問題となつた諸點を論じて行くことにしよう。先づ前母音として /i/ がある。これは bit/bit/ の母音である。beat は /biyt/ と解釋する(子音の所で述べるが /y/ = [j] である)。(i:) = /iy/ の理由は、[i:] が [i] の單なる長音でなくて、Kenyon や Pike の指摘した如く quality が異なることゝ、しかも兩者を同一環境で比較した場合、quantity に於ても相對的相違があるという事實に基く。現代英語では、長音には glide が現はれるという音聲學の説明も之を裏書する。服部博士は ligature を用いて  $\widehat{iy}$  の如く表し之が單なる二つの phoneme の連続でなく、一つの unit であることを示すべきだという。これは充分に根據のあることで結構であるが、そうすれば few も  $\widehat{fyuw}$  としなければならず street も  $\widehat{stryt}$  となり、segmentation の意味が減じ、又 economy の原則(これを固執するのではないが)からも好ましくない。そうすれば、結局 /iy/ は Pike の /i/ と表記こそ異れ、構造的解釋は五十歩百歩であろう。同氏は zero phoneme /' を案出して juncture を排するのであるが、これはその爲の一つの便法となつてゐるのである (“Phoneme, Phone and Compound Phone” 参照)。尙 Lado は bee on your knee が beyon your knee とならない事實を擧げて /iy/ に反對するが、これは別の問題である(後述)。又 speed や stress や語形の關係で three /θriy/ が /θrʌ/ となるようなことは、單に alternation (variation, fluctuation) の問題であると解釋する。次の /e/ は bet/bet/ の母音であり、bait は /beyt/ となる。/æ/ は bat/bæt/ の母音である。次に後母音に就て述べると、/u/ は bull/bul/, boot/buwt/ に現はれる。その次の /o/ と /ɑ/ (これを後母音としたことは、/a/ 及び /ɒ/ との關係に於て無理ではないであろう) に就ては少し問題がある。boat は /bowt/、bot は /bat/ であるが、bought を /bot/、balm を /bam/ としてよいだろうか。私はこの二つに於ける音は長いと考える。phonemically には或る意味で之は必ずしも重大ではないかもしれない。何となれば、今對象としている中西部方言に於て長短で contrast をなすものは非常に少いからである。然しながら、皆無であるわけではない。例えば Moor が言つてゐるやうに bomb と balm は多くの人は區別するやうである。father と bother の第一母音は共に /a/ で表はし、bought と boss や offer (大体英國英語の /ɔ/ は當地では /a/ になるが、後述するやうに若干の例外がある) は /o/ で示しても、そこに混亂は來さないであろう。然し、同一の環境に於ける相對的問題として相違があるとみるのが、特殊な立場を固執するのでなければ、一般的な觀察として、妥當ではないかと思はれる。勿論中西部方言の中でも全く一樣

ではないことも考慮される（私はこのことに就て疑問を抱いたので、歸國後わざわざ Pike に手紙で質した處、彼から8月7日附で、“For my dialect the syllabication of father and bother is the same” という返事を受取つた）。事實このあたりでは /a/ や /o/ が長めに發音される傾向のあることは、私も氣附いてないこともないが、問題はそれだけですまないのではなからうか。裏から言えば私は father の第一母音は短く發音（bother の第一母音と同じ程度に）されることはないと思うのであり、又それを聞いたことがない。つまり Jespersen の所謂 “fester Anschluss と loser Anschluss” の區別がこの場合存在すると信ずる。このことは Bloch が father を /fah/ と解釋したことに關連を有する。彼の説（特に /h/ に就て）は、全面的に賛成し難いが、少くとも /a/ と /o/ に就ては、この問題があると思はれる節がある。私の解釋は beat, bait の場合と全く同一であつて、quality と quantity の兩方に於て差異があるとみる。従つて /ə/（glide [子音の項で説明]）が第二要素となるわけで、bot/bat/, balm/bæm/, boss/bos/, bought/boʊt/ となる（尙 Ripman の Elements of Phonetics 參照）。Bloch は其他の母音にも引伸しを認めているが私は採らない。尙 pot と part はこの方言では /a/ と /ar/ となるから問題はない筈である。それから、bite/bayt/, bout/bawt/, boil/boyl/ であることは特に述べる必要はないであらう。次に Central 乃至 Neutral vowel として /ʌ/ を認める。これは but/bʌt/ の母音である。[ʌ, ə] や [ɜ, ʌ] の差はこの場合は無意味である。above は /ʌˈbʌv/ とすれば足る（理由は 1. under different conditions 2. complementary distribution）。尙英語の特徴として、殆ど全ての母音が無強勢の時 schwa 化する傾向があるが、それを皆強勢母音と同じ符號で表すことは不可で、[ʌ] のみならず、他の母音でも現實の音が [ə] ならば、全部 /ʌ/ で表はす。つまり alternation と解する。又無強勢でも schwa 化しないこともある。次に bird [bɜːd] の音は如何に解釋すべきであらうか。Pike もそうであるが、この成節要素を /ɪ/ とする人が多い。これと關連して mental, rhythm, certain の如き場合に、夫々 /l, m, n/ とすることも行はれている。一体 syllable とは何であるか、という問題がこゝで明らかにされねばならないのであるが、これは、わかっているようでわからない怪物であつて、syllable の解決に一生を捧げた Stetson も、之を全く解決することなく洩した程の問題である。彼の説は chest pulse であるということであつて要約することが出来る。一般に sonority 説も有力であるが、又 stress 説もある。又兩者だとする學者もあり、呼氣通路の開閉、呼氣流出量の變化、喉頭の弛緊等の説もある。Jones の如く、prominence を唱える人もある。Pike は chest pulse+sonority だという。de Saussure の point vocalique を更に expound した Grammont の説は、croissant と décroissant によつて之を説明せんとするものである。Hjelmslev の structural interpretation は面白くて採るべき點もあるが、一面餘りに機械的である。syllable division に至つては到底 Phonetics では解決が困難ではないかとさえ思はれる。そ

こで當面の問題としては、phonetic syllable と phonemic syllable を一應分離して考えてみる  
ことが便利であろう。事實、實在の言語は音聲學の理論に逆行と逆行がなくとも不自然な構造を  
持つものが時々存在するのである。又 cow [kau] は英語で一音節であるが、西語の話手にとつ  
ては二音節に聞かれるといった事實は、勿論嚴密に音聲學的に訓練し分析能力を高めるならば説  
明は可能であろうが、實際問題としては中々難かしい。Bloomfield は syllabic stress (これは  
secondary phoneme であると彼はいう) ということで stirring/strɪŋ/ と string/'strɪŋ/ を説明  
している (stress は suprasegmental であるから、次元の異なるもので説明することには問題も  
あろう) が、butter /'bʊtɹ/ になると妙である。が彼は後者の場合は natural distribution に  
よつて、syllabic になるというが明確ではない。Pike は butter の第二音節の成節因子が /r/ で  
ある故に、distribution により bird のそれも /r/ であると私の質問に答えたが、考えてみると  
實は本末を顛倒した解釋である。然も彼自身は [r] は vocoid であるが、distribution によつて、  
consonant としているのであるから、矛盾しているといはねばならない。そこで /r/ を phoneme  
of syllabicity として定立することを suggest しているが、まだ自信がないと述べている。勿  
論これも一つのやり方であろうが、然らば /r, l, m, n/ は vowel (syllabic なるが故に) とすべ  
きことになる。斯くすると、ことは甚だ紛糾してくる。音そのものとしては /r/ は voiced retro-  
flexive vocoid であるから、vowel としても不自然ではないが、red の如き distribution から  
考えて、patten CVC (子音+母音+子音) によつて consonant となることは、音聲學的には  
母子音の區別が delicate な yes の第一音が /j/ となつて、consonant になるのと、同様な手續  
である。syllabic になつても /r/ の音の本質は、一つの phoneme としては同じである。/l, m,  
n/ に於ても事情は同様であつて、syllabic になつても本質的な音の差異はない (更に之等は  
vowel には縁遠い contoid ですらある)。然るに、phonemically には、一つの phoneme が、  
同時に vowel と consonant になり得ない。然らば /l, m, n, r/ は子音であり、/l, m, n, r/ は  
母音であるか、といへば、誰しもこんな分類が不都合であるとするであろう。ただこの場合 /r/  
は [ə] で表はされるように、/e/ とすることは出来ないであろうか。これはかなり筋が通つてい  
る。何故なら bird [bɜ:d] の [ə] は、mental, rhythm, certain の [l, m, n] と異り、音聲學  
的に bought や father の母音と同様な音價を持つているからである。又 [l, m, n] は syllable  
を構成しないという考え方もある。つまり people は phonemically に一音節であるというわけ  
である。please の /pl/ は syllable ではないのに people の /pl/ は何故 syllable であるの  
かという問題もある (Bloomfield は rhythm は一音節にしている)。更に [ə] は前に如何なる  
phoneme をも取り得るが、[l, m, n] には限定があるという事實も考えられる。然し、音聲學

的事實を無視することは正しいやり方ではない。rhythm も people もやはり二音節であり、[ə] と [l, m, n] は構造的型式 (structural pattern) は同一であるとすべきである。従つて [ə] を /ə/ とすることは不可である。今一つ考慮すべきは、fear, poor, far, fare, for 等々に於て、/ə/ は /ir, ur, ar, er, or/ と解釋されるのに、fir のみが /ə/ という特別の phoneme をもつことは、全体の組織体系を破壊することになる (之等のすべての母音を所謂 r-colored vowel として表記する IPA は存在しているが、私は採らない)。斯く観じてみると、結論は自明であつて、[ə] は /ʌ/ とならねばならない。同様に [l, m, n] は /ʌl, ʌm, ʌn/ である。この表記が決して arbitrary なものでないことは、bird の ir は /ʌ/ が /r/ なる glide に續かれるとして差支がない事實 (/ar/ や /ir/ 等に比べて /ʌr/ は調音部位が同じなので連続が緊密であることは認めてもよいが、b との結びつきは /br/ ではない)、及び mental, rhythm, certain に於て ['mentəl, 'rɪðəm, 'sɜ:tən] という發音も實在し ['mentəl] と ['mentl] は contrast (opposition) をなさないということ、しかも、例えば meddler と medler とは實際の發音が異なるのであつて、Jones の “The Phoneme” では length の prominence の差があることが指摘されているし、Trubetzkoy の “Anleitung” にもあるような特殊な分布と分節性、即ち consonant cluster [後述] と區別出来る事實、更には無強勢の /ʌ/ は英語に於ては reduced syllable の符號となつて (例えば competence /'kʌmpətəns/)、これある爲に成節となるわけであつて (私はこれこそ狭義の phoneme of syllabicity 名を與えたいのである)、syncopation の現象はこの vowel が脱落したものであること等によつて妥當性を支えられる筈である。[ə] (</ʌ/) が常に現はれない語があるとしても、それは structural pattern による potential reality であつて、私の言う内部形式はこれによつて具現されるのである。

以上によつて私の vowel の解釋は一應の暫定的結論を出したことになるが、要約すれば極めて簡單である。即ち、「成節要素は一つの母音であり、その種類は七つ、二重母音及び長母音はなく、之等は母音+子音(半母音)の特殊結合であるが、一般の pattern の例外ではない」ということに過ぎない。これを表にして示すと、右の如くである。

	/v/	/v+c/			
		/v+w/	/v+y/	/v+ə/	/v+r/
/i/	bit	—	beat	—	beer
/e/	bet	—	bait	—	bear
/æ/	bat	—	—	—	—
/ʌ/	but	—	—	—	bur
/a/	bot	bout	bite	balm	bar
/o/	boss	boat	boil	bought	bore
/u/	bull	boot	—	—	boor

この表で一言附記しておかねばならぬことは、英語の特徴音である /æ/ はこの方言では稍不安定な要素を内蔵し、/v/ の場合にのみに現はれ、他の場合には /e/ の系列に含まれる傾向があるということである (carry は /'keri/, Paris は /'peris/ と中西部で多く發音される。尙 stadium /'steydiəm/, patron /'peɪtrən/, glacier /'gleyʃər/ 等の發音も参考になる)。私はこの /æ/ は或はもつと分析出来るのではないかとも考えているが、現在の所は獨立せる phoneme として定立しておく。Jones の /a:/ に對する /a/, Bloch の /o/ に對する /a/ が /æ/ を代表することに關する私の不満は既に述べた通りである。又 [æ] = /e + a/ の解釋は一應考えられるが、今の私の system に於ては採用出来ない。

(B) **Consonant** 子音の方は母音に比べると、整理は割に簡單であつて、表に示した通り従來の Phonetics の分類表と餘り異なる。既述の建前から、なるべく、音聲學の符號 (IPA, Broad Notation) と同じものを用いた (米國では [ʃ, ʒ] は一般に /š, ž/ と Bloomfield 式の wedge 附のものを採用している)。若干説明を要するのは次の如きものである。/y/ は [j] を示す。何故 /j/ としなかつたかといへば、破擦音 [dʒ] に /j/ (米國では普通 /j/) を用いたからである (/dʒ/ としない理由は後述)。これは英語に於ては、他と紛れるに心配はなく、又文字と音とが釣合っているから便利である。/c/ は [tʃ] を示す。この文字は他に使はれないから混亂の恐れがない (米國では普通 /č/)。/r/ は實は retroflexive の他に central のものもあるが (C, K. Thomas のもの参照)、前者が普通なのでこれで米國の r 音を代表せしめた。/w/ は velar としてもよいが、lip に重點を置いた。/ə/ は、母音である [ʌ] 及び [ə] を /ʌ/ で表記したので、稍紛らわしいが、約束さえ諒解されれば他に特殊な符號をつくるよりも、子音符號としてその音價が最もよく表現出来る點に注目してこれを使用した。これは或る種の引伸し要素 [:] に略々該當するとしてよい (然し音聲學的にも /ə/ で表はしてよい根據がある)。

子音の中で、Glide として示したのは、所謂半母音である。これは、音聲學的には母音との區別が delicate であり、その説明も色々なさされているが (既述 vocoid 参照)、phonemically には、structural pattern に従つて、non-syllabic なものは子音とみるべきである。[w] と [u], [j] と [i], [ə] と [e], [ʌ] と [:] との差は、syllabic であるかないかである。即ち /w/ は wish, slow 等に於て、/y/ は yet, stay 等に於て、[ə] は red, far 等に於て、CVC pattern により子音となる。/ə/ は initial には來ないが、final での bah や law 等に於ける實現や、how, say 等との congruity によつて子音とされる。尙 /h/ は voiceless vocoid で、實は後續音と調音様式は同じなのであるが、bat, pat, hat と initial だけにのみ contrast をなす。final には來ない。/ʒ/ は initial には出ない。medial 及び final (外來語) に限る。尙 /ŋ/ も initial には現は

れない。which や who の [ʍ] や huge, human の [ç] は /w/ 及び /ç/ にならないかと考えられるが、後者は特に對立するものがないから /hy/ とすることが出来るとしても、前者は whale, wail 等の對比があるから（この方言では wh の綴は、Kenyon が例外とする感謝詞の why に於ても [ʍ] となる）、一寸難かしい問題となる。即ち /p:/b/ や /t:/d/ の symmetry に於て /w/ はむしろ望ましいのではないかということも考えられる（Pike: Phonemics, p. 133b）。

尙之と關連して [tʃ], [dʒ] を /c/, /j/ とする事情も併せて解明しておかねばならない。第一に、/w/ に對して /w/ を認めるならば、當然 /y/ に對し /ç/ を認めねばならない。そうなると、半母音（Glide）の系列で /r/, /θ/ に對立する無聲音が必要となつてくる。然しそんなものをつくつても無益であろう。同じ筆法で行けば、Nasal や Lateral にも無聲音を對立しならないけれども、其等は少くとも英語では必要でない。従つて、均勢に重點を置きすぎることは誤りであり、又 sonority の大きな、Nasal, Lateral, Glide の系列が有聲音に限られている方が整然性に於てまさる。第二に、[ç] の場合は特に /ç/ に續く音が限定されていて（即ち human, hue, huge 等に於ける /u/ のみである）、然もそれと contrast を爲すものは稀少である。故に [ç] は /hy/ とすべきであろう。又別の觀點からすれば、/h/ はその後に /y/ のみならず他の子音、例えば /w/ と結んで、which 等を構成し得るし、又 /y/ はその前に /h/ だけでなく他の子音、例えば /m/ と結んで music 等を成立させ得る事實は、一方に /yu/ の結合が一つの pattern であると同時に、/h/ と /y/ の combination が不可分のものではないということを示す。同じ理由は、/w/ の場合にも適用が可能である。/h/+w/ が /w/ でなければならぬとしたら、例えば sweet, queen 等に於ける /sw/ や /kw/ も夫々獨立した simple phoneme であることを主張し得る権利があることになるが、whale と wail の contrast は、sweat と wet, quick と wick の對比と全く同じである。斯くしてみると [ʍ] も /hw/ とすることが妥當であることがわかる。第三に、[ç] 及び [ʍ] は initial では contrast をなすが、medial 及び final に於ては現はれない。つまり二つの phoneme かいつも不可分な一單位として働くことはない。この意味に於ても、これ等は consonant cluster 即ち /hy/, /hw/ とみて一向に差支がないわけである。以上述べたような立場から眺めてみると、/c/ 及び /j/ は、音そのものは [tʃ] 及び [dʒ] の破擦音であるが、繼起的最少單位であることがわかる。/ʃ/ には /pʃ, kʃ, fʃ/ 等の結合なく、又 /ʒ/ には /bʒ, gʒ, mʒ/ の如き單位的結合はない。結合とは勿論既述せる如く、contrast をなす單位としてある。そして之等は、initial (chair, jail), medial (hatchet, gadget), final (catch, bridge) 等に例外なく現はれる。即ち syllable 形成に常に indivisibility を示すのである。Bloch は white shoes vs. why choose に於てこの區別は juncture によるもので、segmental phoneme の差によるものでないと言うが（Outline of Linguistic Analysis）、この議論は強力なものではないと思う。

然らば beds とか cats 等に見られる [dz], [ts] の音は如何ということになるが、/t/, /d/ は /tr/ (tree)、/dr/ (dry)、又/s/ は /ps/ (lips)、/z/ は /mz/ (hems) 等の如き結合が可能であり、且つ initial, medial に於て現はれることがない（外國音を寫したもの〔例えば Czar〕はこの場合問題にならない）から consonant cluster とみる方が妥當である。

次に consonant cluster として、如何なるものが重要であるかという問題が生ずる。このことを取り上げる理由は、音聲構造を究める場合、syllable の成立の仕方が關與することになるからである。この問題に關しては、色々先人の業績があるが、代表的なものは、Jespersen の “Monosyllabism in English,” G. Dewey の “Frequency of English Speech Sounds,” Trnka の “A Phonological Analysis of Present-day Standard English,” Bloch & Trager の “Outline of Linguistic Analysis,” K. Malone の “The Phonemic Structure of English Monosyllables,” Bloomfield の “The Stressed Vowels of American English,” Fries の “Teaching and Learning English as a Foreign Language” 及び B. J. Wallace の “A Quantitative Analysis of Consonant Clusters in Present-day English”（未公刊の Doctorate Dissertation at the University of Michigan [1950]）等が數えられるであろう。この調査は實に多大な勞力を必要とするのであるが、各人の成果が皆異つて現はれているところに、又興味がある。母音と子音の解釋如何によつて當然その種類も同一ではないから、ことは甚だ面倒である。この方言の實際の speech に行はれる音を記録した資料を有する Wallace の報告は貴重なもので、英國英語を素材とした Trnka や Jespersen のものとは比較に無理があるが、Bloomfield や Bloch & Trager の調査とも、文、口語による當然のズレがあつて面白い。然し私は今まで述べて來た立場から別個の結果を示すことにする。

## (I) Initial

- a) / +r/            /pr/ (pretty), /br/ (bread), /tr/ (try), /dr/ (drive), /kr/ (cross),  
                      /gr/ (grass) /fr/ (fry), /θr/ (throw), /ʃr/ (shrill)
- b) / +l/            /pl/ (play), /bl/ (blow), /kl/ (club), /gl/ (glad), /sl/ (sleep), /fl/  
                      (flag)
- c) / +w/            /tw/ (twin), /dw/ (dwell), /kw/ (quick), /gw/ (Guam), /θw/  
                      (thwart) /sw/ (sweet), /hw/ (while),
- d) / +y/            /py/ (pure), /by/ (beauty), /ky/ (cute), /gy/ (gules), /fy/ (few),  
                      /vy/ (view), /my/ (music), /hy/ (human)

（この方言で規則的に [ju:] が現はれるのは、Labial [Bilabial 及び Labio-

dental] 及び Velar [Glottal を含む] の二種の音であつて、他の音〔例えば duty〕には、[u:] が普通である。sure等 は /ʃu/ であつて /syu/ ではない。尙 Mencken も指摘しているように valuable には /ly/ が現はれるが、stress のかゝる本来の syllable [後述] には例外がない。

e) /s+ /            /sp/ (spoon), /st/ (store), /sk/ (school), /sf/ (sphere), /sm/ (smile),  
/sn/ (snow) (及び /sl/ /sw/ は既出)

f) /e) +a) /        /spr/ (spring), /str/ (strike), /skr/ (screen)

      /e) +b) /        /spl/ (split)

      /e) +c) /        /skw/ (square)

      /e) +d) /        /spy/ (spew), /skw/ (skew), /smy/ (smew)

尙 Bloch は /c/ を /tʃ/, /j/ を /dʒ/ とみるから cluster になる。その他に /sθ/ (sthenic) を挙げているが、之等は特別な case で、一般的には無理であると思う (何故なら、例えば esthetic は /es/ と /θetik/ に分けられるからである)。

## (II) Final

この position に現はれる cluster の分類で注目すべきは、Bloomfield の pre-final, main final, post final の區別であろう。即ち、英語に於ては、動詞及名詞の語尾の -(e)s や 's/s, z/, 及び動詞の過去につける -t, -(e)d /t, d/, 更に否定の not や is, has, would, had 等の contraction による /s, z, t, d/ が壓倒的に多い。これを Bloomfield は post final とするわけであるが、これは morpheme の問題であつて、服部氏の如く、syllabic position に zero phoneme を定立することは、故なしとしない。然し /nok<sup>o</sup>s/ (knocks) と /oks/ (ox) に果して同氏の言う如く、發音にその差があるかどうかは斷定の限りでない (Jones も box と locks は同様に /ks/ であると述べている [The Phoneme])。従つて、やはり嚴密な Phonemics の立場からは consonant cluster とすべきであると思う (尙 assimilation による voice の有無は、記述的立場からそれを表記すれば足りる。house, mouth 等の pl. に voice が現はれる不規則性は、通時的に説明されるべき問題であるに過ぎない。wife > wives will > won't 等の問題も同様に解釋される。又 Morphophonemics の立場とも、Phonemics は區別さるべきであると思う)。即ちこゝでは、monomorphemic, dimorphemic の區別は “irrelevant” として取扱ふことにする。但し、もはや餘白のない本稿では之等を列挙することは不可能であるから、概括的項的に述べるにとゞめる。

a) / r, y, w, ə+ /    母音の項で述べた Glide は他の子音と結合して、consonant cluster を形成する。bite/bayt/, hope/howp/, part/part/, balm/baəm/等の如くである。然し、そ

のいずれもが後続子音との結合に於て同じ type と種類を示すわけではない。この各々に就て combination を示すことが必要であるが、今は餘裕がない。たゞ /ə/ は voiceless fricative (殊に monosyllable の語に於て) の前には現はれないという大体の規則性がある(即ち、英國英語の [ɔ] /o/ はこの方言では [ɑ] /a/ になり、この方言で前者と共通の音を持つものは voiceless fricative の前〔例えば、boss, moth, office 等〕であり〔尙 Palmer の “American Variants” で dog, long 等を例外にしているが、Marckwardt の調査では Velar の /g, ɣ/ の前では概して /o/ となることは認められるが、irregular には /a/ が現はれることも明らかにされている。Mich., Ill. にはこの傾向がある。or の綴は /o/ が普通であるが、tomorrow の類には /a/ が regular であるのは dissimilation によるものとされる〕、又前者の [a:] /aə/ は、後者の voiceless fricative の前の [æ] /æ/ (half, pass, ask 等) となるから〔尙 /n/ の前でも同様 aunt /ænt/〕、兩者共通の音はそれ以外に多いということになる〔序でに wa の綴の發音に就て述べてみると、次に /r/ 及び /l/ があれば /o/ (war, wall) となり、velar の /k, g, ɣ/ の前では /æ/ (wack, wagon, wangle) が現はれ、其他には /a/ となる (want, watch, water)。最後の場合は人によつて /o/ になることもあるが、Marckwardt の調査によれば、Michigan では前者が優勢である〕。それから、Glide 同志の結合は incompatible で cluster を成立せしめないと解釋する。従つて、fire は /fayr/ でなくて /'fayər/ とすべきであると思う。

b) / +t/ 主なもののみを記すと、/nt/ (rent), /st/ (must, kissed), /kt/ (act, looked), /ft/ (cached), /ct/ (touched), /pt/ (apt, stopped), /ft/ (soft), /mpt/ (tempt), /kst/ (next), /lt/ (belt), /nct/ (lunched), etc., etc., etc.

c) / +d/ /nd/ (wind), /ld/ (build), /md/ (hemmed), /gd/ (begged), /jd/ (judged), /vd/ (lived), /zd/ (buzzed), /ɣd/ (wronged), /lmd/ (filmed), /lvd/ (solved), etc., etc., etc.

d) / +s/ /ts/ (cats), /ls/ (pulse), /ns/ (since), /nts/ (tents) [tence, tents は共に [tents] の發音があるが、こゝでは一應區別しておく。以下同様な場合はこれに従う]、/ks/ (mix, cooks), /sts/ (lists) [時に [s:] となるが、こゝでは一應/sts/としておく。以下同様な場合はこれに従う]、/ɣks/ (thanks), /θs/ (breathse), /mps/ (glimpse), etc., etc., etc.

e) / +z/ /nz/ (lenz, pens), /mz/ (bombs), /dz/ (adds), /ndz/ (hands), /lz/ (bills), /ɣz/ (things), /gz/ (bags), /vz/ (loves), /bz/ (cabs), /ðz/ (paths) [但し clothes /klowz/], etc., etc., etc.

f) 其他 /ɣk/ (thank), /lθ/ (health), /lf/ (wolf), /lb/ (bulb), /nj/ (hinge), /lp/ (pulp), /nθ/ (month), /fθ/ (fifth), /sk/ (desk), /lk/ (milk), /mp/ (lamp), /lj/ (bilge), /sp/ (lisp), /nc/ (bench), /lc/ (belch), /ɣ(k)θ/ (length), /tθ/ (eighth), etc., etc., etc.

g) /a)+b), c), d), e), f)/ /rst/ (thirst), /yðz/ (wreaths), /wmd/ (roamed), /ənt/ (launched), etc., etc., etc.

h) /f)+b), c), d), e)/ /lbz/ (bulbs), /skt/ (asked), /lfθs/ (twelfths), etc., etc., etc.

i) /g)+h)/ /ynjd/ (changed), /rldz/ (worlds), /wkst/ (coaxed), etc., etc., etc.

以上非常に簡単であるが、consonant cluster の概観を終えることにする。勿論音聲學からみて、incompatible な場合があるわけで、Kanter & West の“Phonetics”にはその表があり、Trnka 前掲書にも詳しく記されているが、本稿の場合とは事情が異なるから、更に整理し直す必要がある。Initial と Final の cluster の他に、medial combination の cluster が存在するわけであつて、これに words の語尾と語頭の接續を含めれば、incompatible な結合も実際の speech に現はれるが、これは寧ろ發音教授上の問題となるのでこゝには觸れない（然しその爲に phoneme の脱落や、syllabication の轉移が行はれることがあることは注意しておく必要があるろう）。たゞ、/z-ð/ (is the) 及び /n-ð/ (in, on the) は注意すべき頻度がある。

**7 Syllable** 音節とは何であるか、という問題は非常に解決が困難であることは前にも述べたが、要するに母音が英語に於ては nucleus であるということで、phonemic syllable を解釋して來たのである。もはや豫定の紙數も超過したので、筆を擱くのであるが、今まで行つて來た諸種の解釋は、syllable という、phoneme の上部構造の解釋如何にかゝっているわけであるから、最後に一言附記させて頂く。Syllable は“phoneme の carrier”であり、“phoneme は syllable に於ける permitted sequence に於てのみ appear”するものであり、“之に關係なく speech sounds は存在しない”等々の説明があるが、その boundary の取り方に就ては何人も決定的な解答を與えていない。音聲學者の中には、音韻學者が syllable の問題を取扱うのは僭越であると論じている人もある。たゞこゝでは、私は英語の syllable は、その本然の姿 (stress がある場合) は/CVC/であると考えていることだけを述べておく。この簡単な解釋から、種々の興味ある事實が明らかになる筈であるが、この問題に就ては更に詳説しなければならぬし、又これは supra-segmental phoneme と關係するので、極めて複雑である。今やこれにメスを入れたいのであるが、紙面が許さないで、これ以上は如何ともし難い。supra-segmental で取扱う stress, length, tone, rhythm, intonation, juncture 等々の問題も頗る複雑であつて、之等が解明される迄は、そしてその構造型式 (pattern) が定立される迄は、この方言の音聲構造の全貌は明らかにならない（前に〔後述〕と記して觸れていない項も多い）。こゝに述べた事柄は、未だ過渡的なものであり、改訂を要すべき點も少くないと思うのであるが、機会があり次第、更に未述の諸問題と共に引き續き論ずることにして、本稿に於ては取り敢えず、米國中西部方言の母音と子音に關してのみ、暫定的試案を述べてみたまでである。

(未 完)